

文化政策

横山 俊一

経済学者と名乗るには、一行目に自己の考える経済観を簡潔に纏めて示す態度が求められる。健全な生命観に立脚した経済観にあるか、この点に不信感が生じると、それ以上考えを伺いたいなどという気にはならない。

日々の活動と習慣の成果を、初動的な面に集約して、自己を表す姿に、健全な表現者や生産者の躰や行儀、道徳性や人間性が生まれる。基礎的要素が不足した専門性や特定領域は、良好な内外性を作る事に至らない。生命観、活動観、人間観、各種の専門性、動態と静態と動静という観点と相関が生まれる。

未だ特定分野の領域性について、落ち着きある見解に到達していない水準で、妙な肩書を付ける姿には違和感が起こる。過大な自己評価と歪な願望の前のめった真相が露わになる。肩書が妙に煌びやかで質実性との乖離を見せる様子は、健全な生命観と活動観と人間観に歪性を伝える。基礎性が脆弱な専門性との関わりは積極的に進むことはない。このような規定の精査に適正な根本原理や基準性が生まれる。学問や生産の初動的な基準性に定まる。

こうした関心や着目をもって、基礎分野性と全体と大局性を作り文化なる長期性の概念に発展する。基礎性と根幹性、具象と準抽象と抽象、体系と周期と持続、静態と動態と動静、といった枠組み性に集約される。あまりに生命観が歪であると、歪な全体大局観に陥り、歪な文化観を作り、個別特定観の不良に回る。

躰や行儀の悪い人間性と社会性、領域性に箍のかからぬ病理性を生む。支離滅裂な原論言行、羅列、断片、錯綜、重複、粗末な二項対置概念、等の表現を散乱する。外界への不利益性を増す。

こうした論理に理解と納得、共感が増すと現象性に反映される。徳育と知育と体育性を含む人格観や教育性や教育観を産む。

妙に頭に偏り、躰や行儀が悪く、知育性が発達は、歪な経済観や政治観、教育観や宗教観、文化性を拡大させる。金狂いの金満経営者、机上の学習に偏るがり勉、偏差値バカ、肥満な育ちと躰や行儀の満たない世襲政治等に表面化する。

この手の歪性が妙に金や権力、ポストを持つと暴力性と詐欺性を常態した歪な常識の定着する特定領域性を生む。物質依存性の激しい人格不在の人形とロボットを量産する。哲学と文化の希薄な科学性と技術性を招く。

文化研究所という名称を持つ組織からどのような文化観が示されるか。良好な概念が産出されると現象性に及ぶ。今日、様々な悪性が出出する。良好な文化観の導出にあり文化研究所に関心が集まるか。現象を客観化し検証性を通し改善に連なる。

こそこそ盗んで、流通するピンハネ中抜きは、根本の狂った病理性を生む。直ちに取り締まり負を広げない作為が要る。躰や行儀の悪い虫けらが妙な配置に就くと慢性化した破綻性を深める。

